

事例報告

ある重症心身障害者の「手」への意識向け ～生活と生育歴から考えられたこと～

小野木菜里

要旨：著者は重症心身障害児者施設を利用している成人脳性まひ者を担当した。当初(2009年)、反り返りが強く、声かけへの反応すら不明であった。作業療法では、彼の視覚と手指機能の可能性を模索し、病棟の活動場面も利用して実施していた。ある日、病棟のボーリング活動で、作業療法士が彼の上肢の動きとボールの行方が理解できるよう援助した。すると、結果に対する周囲の称賛と拍手に笑顔が浮かんだ。それ以降、物や手への注視および注視点移行、上肢-手の随意運動が得られやすくなった。そして、現在、母親と二人でワンスイッチによるパソコンゲームを楽しめるようにまでなっている。重い障害のある人に対して、個人の感覚-運動機能への働きかけとともに、生活と生育歴から潜在能力を類推し、生活の場で人と環境とを結びつけることができる可能性を学んだ。なお今回の発表および写真の掲載についてはご家族からの承諾を頂いている。

キーワード：重症心身障害者，生活環境，歴史

はじめに

2009年の入所当初、反り返りが強く、声かけへの応答すら不明であった四肢まひの男性が、ある日の病棟活動を契機に表情や意欲に変化がみられるようになり、その後、目と手を使用した活動へと発展できた。彼のこれまでの生育歴と病棟生活の状況から考察し、報告する。なお今回の発表および写真の掲載についてはご家族からの承諾を頂いている。

事例紹介

37歳の男性。診断は痙直型四肢まひと癲癇で、

改訂大島分類横地私案はA1であった。

1. 生育歴

在胎38週、2900gにて出生。生後7日に痙攣頻発し、核黄疸のため3ヵ月間の光線療法を受けた。1歳3か月時より、肢体不自由児施設で外来リハビリテーションを開始し、その後、通園、養護学校、作業所へとすすんだ。

2. 幼児期

母親や当時の通園保育士から話を伺うと、体調は比較的安定していたが、「いつも怠そうで、玩具を見せても、家族で旅行に出かけても、何をしても、表情を変化させることがなく、どこまで能力があるのか把握することは難しく、抱っこや床で寝かしている時に手足の筋緊張を高め、伸びたままでいることが多かった」と語られた。四人兄弟

の二男で、「家庭はいつもにぎやかで、床で寝ている彼の隣で兄と弟が走り回ったり、テレビゲームをしたりといった毎日であった」と母親は語られた。母親は、「いつの日かきっとわが子の笑顔に出会える」と信じて、生命の不安と発達への期待を感じながら、彼にできる限りの活動経験を積み重ねようとしていた。

3. 学童期～成人期、入所まで

小学校、中学校までは体調が安定したため、母親は彼を兄弟の野球観戦によく連れ出した。高等部に入学後から次第に体調を崩すようになり、徐々に咀嚼と嚥下機能が低下したため、十分な栄養を経口から摂ることが難しくなった。身長は伸びるが体重が増えず、頭頸部の後屈と上下肢の伸展を強めた過緊張状態が続いた。やせ細り、昼夜逆転や肺炎を頻発し、入退院を繰り返す生活になっていった。高等部卒業後、作業所に通所するようになってもこの状態が続き、僅か一年で作業所を退所することになった。

35歳時に誤嚥性肺炎が確認された。このとき、全身の筋肉は落ち、顔はこげ、呼吸をすることも辛そうな様子であったという。母親はこだわり続けた経口摂取を断念し、胃瘻を造設、当施設に入所することになった。

これまでも月1回の作業、理学、言語聴覚療法を外来にて実施していたが、施設入所後は、週1～2回の作業、理学、言語聴覚療法を受け、集団の場を利用した朝のりハ活動にも参加していた。2年が経過した現在（本報告時）、医療的管理により体調を崩すことなく徐々に体重は増えていった。

状態像

日中は、座位保持装置を使用し、ADL 全てに介助を要した。姿勢筋緊張は全身性に低く、定頸無く、時折示す一過性の反り返りとともに、頸部の左回旋、過伸展位を強め、眼球が上転固定することが特徴であった。視覚機能は検査上では反応が無く、見えているのかいないのかの判断はできな



図1 ベッド上でのセラピー場面

かった。上肢・手の姿勢緊張も低く、長期間未使用であったためか、掌屈したまま動かなかった。

生活と生育歴に基づいた作業療法評価

1. 生活エピソードからの解釈

視覚機能の評価はできなかったが、暗室で強い光を発すると笑顔を見せ、声を出して喜ぶ様子から、「光は感じている」ようであった。また、人の声や音に対して表情を変える様子から、「聞こえている」ようであった。反り返りは、意思表示とも考えたが明確ではなく、また、時折見せる笑顔の理由も読み解くことが難しかった。しかし、なぜか母親は彼が阪神タイガースの大ファンであると言い、六甲おろしの曲をかけると確かに口を動かす様子が観察できた。

2. 生育歴からの解釈

これまでの37年間の生育歴のなかで、潜在的に存在していた個々の感覚・運動機能に対して、幼少期から取り組みは積み重ねられてきたが、全身の反り返りにより実際の能力として表出されることはなく、結果として反応が乏しい状態と判断されていたと推察した。

問題点および作業療法目標の立案

視聴覚機能は潜在的にあると思われた。現時点での彼の問題点は、潜在したまま機能が発揮できないこと、つまり、全身の反り返りを強めることで、視野が頭部上方に制限され、音源や自分の手

や関わる人を目で確認することができず、周囲の人や物との関係を理解することができない、そして、周囲の人も彼の能力を見出せないでいることと考えた。

よって、長期目標を病棟で行われている様々な活動で介護者の関わりに対応し、その因果関係を理解し、楽しむことができることとした。そのため短期目標を、個別のセラピー場面で反り返りを調整し、視覚機能とともに手への気づきを促し、対象認識を高めていくこととした。

経過

1. 視覚機能の改善

まず、視覚定位を容易にするために、姿勢は頭部や体幹を保持する必要のないベッド上背臥位を選択した。対象物は、周囲とのコントラストが明確な色彩のボールを用いた。焦点距離を測りつつ注視したと表情で確認したら、OTはゆっくりとボールを動かして追視を促した。このとき、反り返りに結びつかないように頭部を持って保持して追視範囲を広げていった。結果、セラピー場面であれば、反り返りを強めることなく視覚定位するようになった(図1)。

2. 手指への注視の促進

除重力姿勢で眼球運動を引き出した後、座位保持装置姿勢でオーラルコントロールの手技を用いて頭部の安定を助けた。そして、声かけとともに本人の前腕に触って上肢への気づきと注視を促した(図2)。彼の手指と手掌部を強く圧迫することで、次第に指先への意識とともに注視が持続することが確認できた。次に、経過1で用いたボールを手握らせた。そして、OTが手掌背面から覆い被せるようにしっかり握り、ボールと手を動かしていった。次第に彼は手指への圧迫が無くとも手のなかにあるボールを注視するようになった。この頃から母親が彼に話しかけると、彼は返答のような発声をするようになり、母親は「やり取りができていないのではないか」と感じはじめていた。



図2 座位保持で上肢への意識向け



図3 :病棟活動でOTと上肢使用場面

3. 運動会の練習での出来事

病棟行事「運動会」の時期が近づいてきた。今年にはボーリングを行うことになっていた。日々の成果を発揮するため、練習は病棟とOTが協同で取り組んでいた。彼の出番がきた。OTは彼にボールを提示し、注視を促し、手元に置いた。彼は手元のボールを注視し続けることができた。OTは掌屈した彼の手背でボールを押し出すよう援助した。ボールはスロープの上を転がった。そして、ピンが数本倒れた。周囲の称賛の声と拍手が起きた。そのとき、彼は笑った。

この日以降、ボーリング活動で練習を積むごとに、彼はボールを押し出す手に注視するだけでなく、転がるボールにも注視点移行するようになり、上肢と手指にもわずかであるが運動表出が見られるようになった(図3)。

セラピー場面では、応用した動きを引き出すため、スイッチの入力方法を工夫した。しばらく練習を積み重ねると、光る玩具やパソコンの簡単なゲームの練習が行えるようになった。そして、居室のテレビのチャンネルを変えるといった活動にも取り組めるようになり、現在では、面会に来られた母親と二人でワンスイッチによるパソコンゲームを楽しむようになっている。



図4 朝のリハ活動場面

考察

彼は、幼少期から通園や養護学校で療育支援を受けてきた。家族と様々な活動への参加も経験してきた。しかし、なぜ、いまになって、視覚や上肢一手の機能に大きな変化がおとずれたのだろうか。彼の幼少期から入所前までの生育歴と病棟生活およびOTの役割から考察する。

1. 生育歴

彼は高等部入学後から急激に身長が伸び、側彎の進行や摂食機能の低下に伴い誤嚥の危険性が高まり、呼吸障害も併発するようになった。それ以降は、生命維持との戦いになっていったことが推察された。胃瘻増設に至るまでの数十年間は、幼少期から培われてきた機能や様々な活動から得てきた経験に基づく能力を発揮できる身体的かつ精神的な余裕は無かったのではないかと思われた。

そして、彼は胃瘻の手術を受けた。十分な栄養摂取が保障された。さらに、入所して薬を調整し

たことで姿勢筋緊張が落ち着いた。加えて、現在の彼の身体にあった座位保持椅子が作成され、過緊張を強めることなく感覚情報を取り入れやすくなっていた。総合的な医療支援により体調が安定し、もともと彼が持っていた能力を発揮できる準備が整ったと考えられた。

2. 病棟生活の影響

入所してから2年間、同じ空間、同じ仲間、同じ道具、同じ工程で病棟活動は行われていた。入所生活は、我々からすれば一見、代わり映えのない単調な暮らしに映るかもしれない。しかし、重い障害のある人たちにとって、安定した体調の基盤と同様に繰り返しの生活リズムは認知機能に予測可能な因果関係を形成しうる環境にあったとも考えられた。

しかし、OTが関わるまで繰り返されてきた活動では、聴覚と限定された視覚情報とが統合されない状態にあったと思われた。つまり、周囲の状況理解は聴覚情報にのみとどまり、視覚で探索するだけの身体機能が整っていなかったと考えられた。

3. OTの役割

安定した体調と、安定した生活リズムが整ってきた彼に対して、OTは個別セラピーで視覚機能と手への気づきを促した結果、視覚情報と聴覚情報と固有覚を通した手の存在が一致しはじめた。これまで、彼は「見よう」「手を使おう」「口を開けよう」とすれば意図に反して身体は制御不能な状態に陥り、呼吸や咀嚼・嚥下、そして、安眠が妨げられ、自分自身を苦しめる悪循環のなかにいた。生命維持の問題は彼の中では余りあるものであり、その状態で、彼は見ることや、手を使うこと、笑うこと、怒ることなど、外部環境への探索や感情の表出をあきらめざるを得なかった。

聴覚情報のみで習慣化しつつあったボーリング活動において、OTは「ボールの触感」「転がるボール」「倒れるピンの音」「周囲の称賛の声」といった活動内容の理解と予測へと次第に繋げていく役割を担えたと考えた。個別セラピーと並行して

病棟と協働して直接支援を行ったことに重要な意味があった。個別セラピィの成果を病棟活動の一場面に持ち込み、ボーリング活動を通して成功した瞬間に多職種とともに共感することができた。

姿勢筋緊張の調整と感覚情報処理の統合は人や物への興味を引出し、探索行動を生み出し、人や物を介したコミュニケーションへと発展する。介護者が彼のことを「話が理解できる人」「コミュニケーションがとれる人」と認識できれば、介助場面で関わる際に自然に本人へと話しかけ、関係性は広がるものである。

今回、生育歴は彼の潜在した能力を気づかせてくれた。顕在化する個人の機能的問題にのみとられず、過去からの文脈をひも解き、生活時「間」を分析し、生活空「間」を整え、人「間」関係へ

とつなげていく、三つの「間」をつなぐことの大切さを学ぶことができた。

おわりに

現在、朝のリハ活動場面やパソコンゲームの二択は、物を見比べ、声を出してアピールするなど母親やOTと本人の中で確実になっている。母親は、これまで見たり、手を動かしたりすることがなかった我が子の変化に驚き、37年間で最も発達した1年間と喜び、居室にも親子で取り組めるスイッチゲームを導入してほしいと望んでおられる(図4)。

Awareness to the own hand: Narrative report from daily living and life history of a man who has severely multiple handicaps

By

Nari Onogi

From

Osaka Developmental Rehabilitation center

Abstract

The author worked for a man who has cerebral palsy in an institution for severely multiple handicapped. No one could understand what his responses are. In occupational therapy, the author was seeking for possibility of his vision and hand function at his daily living environment. One day, he had a game of bowls. The author assisted movement of his upper extremity and to keep watching bowl. He smiled because of praise and clapping for result from surroundings. After that, he gazes objects and hands also he can switch his viewpoint, and he move his upper extremity-hand actively as well. Now he enjoys playing PC games by using switch with his mother. For a man who has severely multiple handicapped, The author have learned possibility of connecting person to environment at living place not only work for sensory-motor functions but also analogize capabilities from daily living and life history.